

「中学校美術における漫画を活用した授業の構築」

—伝える力の育成を目指して—

A8G31010 山口 愛

指導教員 中川 素子・今田 晃一

1. 目的と研究

平成 20 年度改訂の新学習指導要領において言語活動の充実が方針として示され、国語だけでなく、教育活動全体で育成することが明記されている。言語活動において他者により良く伝えるためには、話し手がより理解していることが重要である¹⁾。つまり伝える力の育成には、伝えたい内容を理解し、工夫して効果的に表現することが必要である。平成 17 年小学国語（教育出版）では、読書単元（13 時間）として漫画が「伝える表現の工夫」として取り扱われており、漫画のコマの意味やフキダシの効果、表情の豊かさなど漫画の中にある内容理解の工夫について具体的に表記されている²⁾。これらの漫画的記号は、文章表現よりも状況やストーリーを説明する「情報の伝わりやすさ」において効果的である³⁾。漫画は内容理解を促進することで、より良く伝えるための有効な手段の一つであると考えられる。

美術教育においては、平成 10 年度改訂の中学校学習指導要領美術の第 2 学年及び第 3 学年の表現に、「漫画」を扱うことが新たに示された。平成 17 年中学校美術教科書（日本文教出版）では「楽しく効果的に表そう」という単元で漫画が取り扱われ、漫画の特徴である「コマ割り」や「視点の変化」や「オノマトペの工夫」などを用いて表現する方法について掲載されている。漫画特有の表現方法は、様々な手法で伝える工夫がなされており、書き手の意図を読み手に伝えるのに有効である。また、「MANGA」という言葉は諸外国でも使われていて、特にフランスでは国立出版社協会の統計に MANGA というカテゴリーを 2004 年に設けるなど、日本の漫画が海外で評価されることも増えて漫画は今や我が国を代表するメディアの一つである⁴⁾。つまり世界的に評価され、日本を代表する文化の一つとして捉えられてきている。

一方漫画が育成する美術の力を、明確に検証している事例が少なく授業が作りにくいことや、教科書によって取り上げ方に偏りがあること、また、漫画というメディア自体が低レベルなものという認識から漫画を美術のカテゴリーに入れることに対する抵抗が根深いことなど様々な原因があるからである。このように軽視されている面、やりにくさから実践されていない現状がある⁵⁾。

そこで本研究では、伝える力の育成を目的とした授業案を作成し、その一部を中学校で実施しその効果を検証し、漫画を活用した授業を構築することを目的とする。

2. 方法

研究1 埼玉県内の中学生の漫画に対する意識調査

対象：越谷市内 A 中学校第2学年 182名 2009年7月実施

研究2 漫画の要素を用いて、日常の豊かさに気づく視点を持ち、それを効果的にストーリーとして組み立てて他者に伝える力、また物事をよく見て捉える力、感情などを形にする力などを育てる、授業案の作成

研究3 教育実践分析実習校における実践と検証

第1～第3学年の1学期分の学習指導案を作成する。そして、漫画を活用した授業を実践する。検証方法として各授業でつきたい力（評価規準）とそれに対する評価基準を明らかにしながら生徒の自己評価と授業者の評価を中心に検証を行う。

3. 結果と今後の課題

研究1に関しては、A 中学校第2学年 182人中、漫画を読んだことのある生徒が99%、ストーリー漫画を描いたことがある生徒が約38%であり、授業で漫画を描いてみたいと答えた生徒は59%であった。そこで、漫画の基本知識があることを加味し、漫画文化の理解を深めながら漫画表現の可能性を広げていくような授業づくりをしていく。また、漫画に対する理解や興味について、授業実践を通してどう変化したかを捉えるためのアンケートを作成し、研究を深めていきたい。

4. 引用文献

- 1) 松友一雄「国語科教育におけるパフォーマンス評価の可能性：言語活動を支える意識の変容を中心に」全国大学国語教育学会発表要旨集 115, pp11-14, 2008年
- 2) 教育出版株式会社「まんがの方法」ひろがる言葉 小学校国語5上 教師用指導書別冊, pp47-61, 2005年
- 3) 佐藤公代「学習漫画理解に及ぼす『漫画表現』の役割」愛媛大学教育学部紀要第I部 教育科学 43(2), pp85-95, 1997年
- 4) 玉田圭作「教育とマンガをめぐる二つの言説～『有害マンガ』と『マンガ利用』～」慶応義塾大学大学院修士論文 2008年
- 5) 金澤韻「漫画の描き方」本と美術教育との関係についての一考察-石森章太郎『マンガ家入門』を中心に』, 美術教育研究会(6), 2000, pp1-18